

幼稚園と小学校の滑らかな接続を図る指導方法の工夫

岡山市立江西小学校 教諭
難波 いづみ

研究の概要

幼稚園教育と小学校教育の滑らかな接続が求められている中、小学校入学期において、幼稚園での道徳性の芽生えを培う指導を道徳の時間の学習につなぐ指導方法を探った。その結果、体験活動を生かす道徳の時間に加えて、読み聞かせを位置付けた一連の指導により、児童は安心して楽しく道徳の時間の学習に取り組み、自然に道徳的価値の自覚に向かおうとする姿が見られた。

キーワード 接続期、道徳の時間、幼稚園、読み聞かせ、体験活動

I 主題設定の理由

2008年1月17日に中央教育審議会から学習指導要領の改善について答申が出された。この答申では、改善の重点の中に、発達段階に応じた学校段階間の円滑な接続が示されている。幼稚園教育と小学校教育の接続については、小学校低学年で、幼稚園教育の成果を踏まえ体験を重視しつつ、小学校生活への適応、教科等の学習への円滑な移行の重要性が示されている。

しかし、教科等の学習への円滑な移行について、佐々木直子(2006)、佐々木恵理子(2007)は、幼稚園教育と小学校教育の内容や方法の違いが児童にとっての段差となっていることを指摘している。さらに、児童の発達や学びは連続しているにもかかわらず、幼稚園と小学校との連携や相互理解が不足しているという課題を示している。

これらの課題を解決し、教科等の学習への円滑な移行につないでいくために、小学校においては、児童が幼稚園で身に付けた学び方を生かした指導を行うことが大切である。

入学後間もない児童に、これまでの生活や学び方と切り離れた指導を行うことは、大きな負担になるであろう。そこで、生きる力の基礎となる幼児教育の成果を小学校教育に効果的に取り入れること、つまり、児童が様々な体験を通して身に付けた学び方を生かすことが必要であると考え。そして、発達や学びの連続性を踏まえたきめ細やかな指導をすることで、小学校生活への適応を促し、児童が小学校の学び方を身に付けることができると考える。

また、入学後間もない児童は、小学校生活への期待と同時に不安や緊張感を抱いている。そこで、道徳の時間において、児童と教師の温かい人間関係の中で、安心して自分の力を発揮できるよう指導方法を工夫することは、入学後間もない児童に必要な支援であると考え。

以上のことから、本研究では、第1学年の4月を接続期ととらえ、幼稚園教育と小学校教育の滑らかな接続を図る道徳の時間の指導方法を探りたいと考え、本主題を設定した。

II 研究の目的

第1学年、特に接続期の道徳の時間において、幼稚園教育と小学校教育との接続を滑らかにするために、幼稚園の学び方を生かした授業改善を試み、授業実践を通してその成果と課題を明らかにする。

III 研究の内容

1 接続期における道徳の時間の考え方

(1) 道徳性の芽生えを培う指導と道徳の時間

幼稚園では、日常の生活や遊びの具体的な場をとらえて道徳性の芽生えを培うとともに、体験活動の前に絵本の読み聞かせで思いを膨らませたり、体験活動後に、体験の中で生まれた思いや願いに気付かせたりする働きかけを行っている。また、それらの指導を幼児一人一人の育ちや心の動きに合わせて繰り返し行うことで、道徳性の芽生えを培っている。一方、小学校では、道徳的価値の自覚を深める学習として、道徳の時間が設けられている。また、意図的に体験活動を設定し道徳の時間と関連付けた指導を行っている。幼稚園と小学校における指導の一例を図1に示す。

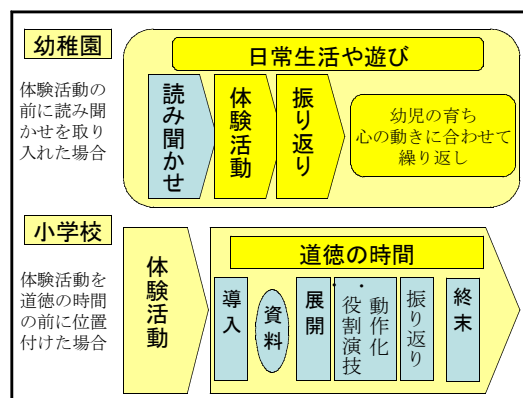


図1 幼稚園と小学校の指導の違い

このように、幼稚園では具体的な体験の中で道徳性の芽生えを培っている。また、小学校では道徳の時間という特設された時間の中で、資料を中心にした学習を通して自分を振り返り道徳的価値の自覚を深めている。

以上のことから、接続期の児童が幼稚園で身に付けた学び方と、これから小学校で身に付けようとする学び方には大きな違いがあることが分かる。

(2) 接続期における道徳の時間の配慮

幼稚園と小学校での学び方の違いと発達の特徴の点から、接続期の道徳の時間では、次のような配慮が挙げられる。

- ・接続期の児童は、小学校の学習に不安を抱いているので、不安を取り除く必要がある。
- ・接続期の児童は、道徳的価値にかかわる自分を振り返る力が十分育っていないので、道徳的価値を感じ取ることができる体験活動が必要である。
- ・体験活動と道徳の時間に時間の隔たりがあるため、体験活動で感じた思いを道徳の時間につなぐ必要がある。

2 研究の方法

幼稚園と小学校の学び方の違いを踏まえ、接続期の道徳では、まず、児童が体験活動の中で感じた思いを道徳の時間につなぐことができるよう工夫する。

そこで、図2のように体験活動を生かす道徳の時間に加えて、読み聞かせを意図的に位置付けた一連の指導を考えた。つまり、幼稚園の学び方を道徳に取り入れるのである。この指導により、児童は読み聞かせで体験活動への思いを抱き、この思いを基に、体験活動で様々な道徳的価値を感じ取る。そして、道徳の時間に体験活動を生かすことができる資料を用いることにより、道徳的価値の自覚に向かうことができると考えた。

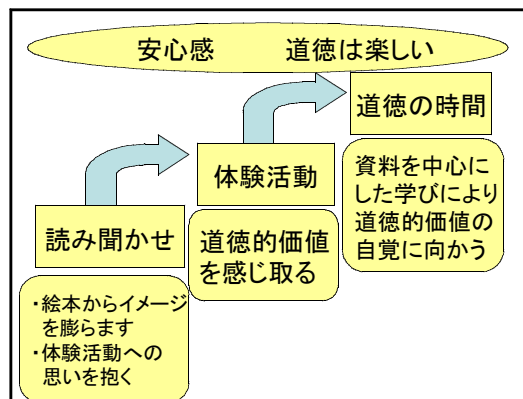


図2 一連の指導と期待する児童の姿

幼稚園の学び方を取り入れた一連の指導の中で、児童は安心して楽しく学ぶであろう。そして、楽しく学びながら道徳的価値の自覚に向かうことで、資料を中心とした道徳の時間の学び方を身に付けていくと考えた。

一連の指導における三つの手だてを接続期に行うよさを次のように考える。

(1) 読み聞かせについて

幼稚園では、幼児が絵本や物語に触れる場面が多い。絵本の内容と自分の経験を結び付けたり想像を巡らせたりする楽しみを味わうことにより、豊かなイメージを育て、言葉に対する感覚を養う指導を行っているのである。つまり、幼児が自分なりの楽しみ方で絵本の世界に浸り、絵本の面白さを味わうことで言葉や道徳性の芽生えを支える心情を育てていることが分かる。また、読み聞かせは、幼児の心の安定と幼児と教師の心の交流を図る。例えば、幼児が大勢の中でも安

心して過ごすことができるように願い、教師の周りに幼児を集めて読み聞かせを行い、教師や友達と一緒に過ごす楽しさを体験できるようにしている。つまり、幼稚園の読み聞かせは、幼児が安心して言葉による心を動かす体験をし、自分の内面を豊かにする学びを育てるというよさがある。したがって、読み聞かせを取り入れることで、児童は安心感を抱きながら絵本から受けるイメージを膨らませ、体験活動への思いを抱くことができると考えた。

(2) 体験活動について

接続期の児童は、幼稚園で様々な道徳性の芽生えを身に付けてきたが、未発達な状態である。また、体験したこととその体験から生まれた感情が切り離せないという幼児期の特徴を残している。したがって、接続期の指導は、具体的な人や物事とかかわる中で、児童の感情を掘り起こし、そこから道徳的価値を感じ取らせることができる体験活動が必要である。このように、接続期の発達と学びに即した体験活動の充実が、児童を道徳的価値の自覚へ向かわせる力になると考える。

(3) 体験活動を生かすことができる資料について

幼稚園では、あらゆる生活場面を通して、今、幼児が置かれている状況を瞬時に理解した教師が、幼児の心の動きに合わせた指導を行っている。遊びの中で生まれる葛藤や幼児同士のトラブルを通して、善悪の判断、相手を尊重する気持ちなどの道徳性の芽生えを培っている。このように、今の状況に応じた指導を受けてきた接続期の児童にとって、道徳の時間は今まで経験したことのない時間となる。そこで、体験活動を生かすことができる資料を用いることは、児童が資料の内容を自分も体験したことと受け止め、自然に資料へ入り込めるよさがあると考えられる。

3 授業実践～親切な心を育てる接続期の道徳学習～

主題名：温かい心をとどけよう

資料名：「くまさんのボールなげ」

ねらい：身近にいる幼い人に温かい心で接し、親切にしようとする心情を育てる。

対象児童：岡山市立江西小学校 第1学年2学級 54人



図3 読み聞かせに用いた絵本

(1) 指導法の工夫

ア 読み聞かせ

道徳の時間に育てたい道徳的価値に向けて、意図した思いを抱かせるには絵本の内容を徐々に高めていく必要があると考える。そこで、朝学習と図書の時間を使って3冊の絵本を読み聞かせる(図3)。この3冊の絵本を順に読み聞かせることにより、絵本に登場する人物を共感的に受け止め、相手の気持ちを考え、身近な人に親切にしようとする思いへ次第に高めていくことができるようにする。さらに、読み聞かせ後の教師と児童の和やかな語らいの場で、体験活動への思いを出し合わせ、その思いを教師や友達と共有できるようにする。

読み聞かせに用いた3冊の絵本から、児童に抱かせたい思いを表1に示す。

表1 絵本から抱かせたい思い

絵本名	「うれしいね、よかったね」(やすい すえこ作, しんの めぐみ画, 教育画劇)
	登場人物の「うれしいね、よかったね」という言葉を通して、相手の喜びを共感的に受け止めようとする思いを抱かせたい。
絵本名	「ぼっかぼかのおまじない」(三枝 三七子作・画, 偕成社)
	主人公の優しさのあふれる行いから、自分がしてもらってうれしかったことを、相手の気持ちを考えながらしてあげようとする思いを抱かせたい。
絵本名	「げんきをだしてね かえるくん」(マックス・ベルジュイス作・画, セーラー出版)
	弱い立場の主人公を思いやり、励ます人物の行いから、弱い相手の気持ちを考えて自分なりの親切な行いをしようとする思いを抱かせたい。

イ 体験活動

体験活動として、園児との交流を計画した。それは、接続期の児童にとって身近な園児とかかわる中で、読み聞かせで抱いた思いを発揮しやすい活動であると考えたからである。また、大半の児童は昨年、小学生との交流を経験している。昨年度の様子を当時の幼稚園の担任から聞き取ったところ、交流では小学生が積極的に園児とかかわってくれたので、楽しく活動することができたそうである。また、交流後、「早く小学校に行きたい」という期待感も高まったそうである。

このように接続期の児童は、楽しかった交流活動を昨年経験しており、立場が変わっても、児童にとって取り組みやすい活動であると考ええる。

ウ 体験活動を生かすことができる資料

昨年度の交流の様子を当時の担任から聞き取ったところ、最初は、小学校に来て戸惑っている園児を遊びに誘いたかったが、すぐに誘えなかった児童が大半であったそうである。しかし、声をかけることがきっかけで園児と一緒に活動する楽しさを徐々に味わうことができた児童や、教えることに喜びを感じ何度も自分から園児にかかわろうとする児童が現れ、活発な活動へと向かったそうである。

これらの聞き取りを基に、一連の指導を生かすことができる資料として、園児と交流した体験が自然に想起できるものを探した。最もねらいに近い資料として「いしけり」（文溪堂）を選んだが、より児童の体験に沿う内容にするために出版社の許可を得て、表2に示す資料「くまさんのボールなげ」を作成した。

表2 資料のあらすじ

くまとたぬきは、ボール遊びが大好きである。2匹がボール投げをして遊んでいると、幼い子りすがやって来る。子りすは、くまたちが遊ぶ様子をじっと見ている。子りすと目が合ったくまは、子りすをボール投げに誘おうと思うがすぐ声をかけることができない。しかし、くまは思い切って子りすを誘い、ボールの投げ方を教えて遊ぶ。くまは、うれしそうな子りすの様子を見て、親切にできた満足感を味わう。

(2) 授業実践における児童の活動の様子

次に、読み聞かせから道徳の時間における活動までの様子を児童の思いを交えて紹介する。

ア 読み聞かせ

児童は夢中になって絵本のお話を聞いていた（図4）。絵本「うれしいね、よかったね」の読み聞かせ後、児童は、相手の喜びを共感的に受け止めている登場人物を優しいと感じていた。また、絵本「ぼっかぼかのおまじない」の読み聞かせの後、「おまじないは、優しいおまじないだ」「ともちゃんは、動物たちにおまじないをしてあげて優しい」など、主人公の優しさを感じ取った発言が多くあった。さらに、「ぼくも友達にドッジ（ボール）に入れてもらったときうれしかった」「友達をドッジに入れてあげてよかった」と、日常の体験と重ねて自分の思いを話す児童がいた（図5）。

また、このころ、園児と遊ぶおもちゃを作った。そのとき「ぼくも遊んでもらったよな」と、昨年の体験を想起していた。そして、「ぼくが作ったどんぐり迷路を教えてあげたい」「一緒に遊んであげたい」「『遊ぼう』と誘いたい」など交流への思いを抱くことができた。

イ 体験活動

児童は、自分が作ったおもちゃを持ってグループに分かれた。園児は、どこのグループに行こ

児童の表情が鮮明な写真のため、掲載を控えます。

図4 絵本のお話を聞く児童

児童の表情が鮮明な写真のため、掲載を控えます。

図5 自分の思いを話す児童

うかと児童の様子をうかがっていた。しかし、大半の児童がおもちゃを傍らに置いて座ったままである。そこで、あるグループの児童たちに「一緒に遊びたいよね。どうする？」と声をかけた。すると、そのグループにいた一人の児童が「魔法の言葉を言ったらいい」と言った。「魔法の言葉って、なあに？」と尋ねると、その児童が「『おいで』とか、『遊ぼう』って言ったらいいんだよ」と答えた。そこで、「『おいで』『遊ぼう』って誘ってあげるといいんだね」と返した。このやり取りをきっかけに、児童たちが園児に声をかけて一緒に遊び始めた。次第に、児童から声をかけて活発に交流する様子が至る所で見られるようになった(図6)。



図6 園児と交流する児童

交流後、児童は園児を誘い共に遊んだことをうれしく感じていた。さらに、児童は、積極的に自分から声をかけることでより楽しく園児が活動できると感じていた(表3)。

表3 交流後の記述の一部

小さい子に「おいで」っていつてみたら、きたのがうれしかった。
もうすこし「あそぼ」っていつたらよかったよ。

ウ 体験活動を生かす道徳の時間

資料「くまさんのボールなげ」を絵話にして提示した(図7)。教師が資料を読み聞かせている最中、「幼稚園だ」という児童の声が上がった。さらに、資料を聞き終わった直後に、多くの児童が周りの児童と顔を見合わせて「幼稚園だ」とつぶやいた。このつぶやきは、資料に登場した主人公に園児と交流したときの自分を重ね合わせた反応であった。

児童の表情が鮮明な写真のため、掲載を控えます。

図7 資料を聞く児童

展開の前段部分では、主人公が子りすと目が合ったけれどたぬきとボール投げを続けている場面で役割演技を行った。役割演技を用いた話し合いを通して主人公の気持ちを考えさせることにより、子りすを思いやり、誘って一緒にボール投げをしたことが親切な行いだと気付くことができた。

表4 振り返りの記述の一部

ぼくは、ようちえんの人をさそいました。そのおかげで、いっぱいよってきました。
ようちえんの方は、とても、うれしそうでした。

また、展開の後段部分では、表4に示すように、大半の児童が、園児と交流したときの自分を振り返り、自分の行いが園児の喜びになることに気付いた。振り返りができにくい児童には、交流の様子を基に園児にかかわったときの思いを尋ねた。すると、児童は、「幼稚園の人が来たとき、どんぐり迷路を教えたのが親切かなと思いました」と、園児にかかわったときの行いを親切の道徳的価値に結び付けて振り返ることができた。

(3) 授業実践の考察

読み聞かせ、体験活動、道徳の時間という一連の指導で見られた意識のつながりを図8に示す。

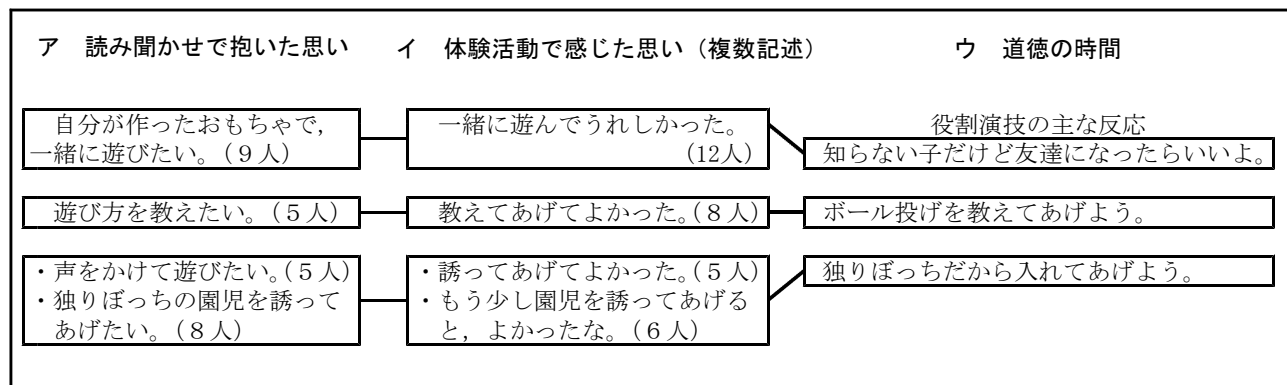


図8 一連の指導における意識のつながり(1学級27人対象)

読み聞かせでは、3冊の絵本から膨らませたイメージを基に、児童全員が体験活動への思いを抱くことができた(図8のア)。特に独りぼっちの園児を誘ってあげたいという思いが多かった。これは、幼い園児が初めて小学校にやって来ることから、児童が抱いた園児への思いやりであることがうかがえる。このことから、読み聞かせは、児童の意識の中で親切についての道徳的価値への方向付けになることが分かった。

体験活動では、実際に園児を目の前にすると、大半の児童が園児とかかわるまでに時間がかかった。園児を誘う声かけを「魔法の言葉」と言った児童と教師のやり取りをきっかけに、周りの児童の活動が徐々に活発になった。このことから、教師が児童と一緒に考えたり児童の思いを共感的に受け止めたりすることは、特に接続期の児童の活動を促す上で大切な働きかけであることが分かった。このように、園児を誘おうか迷ったけれど、思い切って声をかけた体験があったからこそ、自分の思いを実行できた喜びを感じ取ることができたと考える(図8のイ)。

そして、道徳の時間に資料を聞いた児童は、自然に体験活動を想起し、体験活動の自分を資料の主人公に重ねていた。これは、園児を誘おうか迷ったり思い切って誘うことで園児が喜んだりした自らの体験を映し出す資料であったからと考える。また、役割演技では、幼い相手にどんなことをしてあげたいか具体的に表現している(図8のウ)。体験活動で感じた思いを基に、資料の人物を演じることで、無理なく道徳的価値に向けた思いを表現できたと考える。

以上のことから、意図的な読み聞かせを位置付けた一連の指導により、児童は、体験活動で感じた思いを自然に道徳の時間につなぎ、自分の体験を道徳的価値の自覚に向けてとらえ直すことができたと考える。

IV 研究の成果と今後の課題

1 成果

授業実践を通して、体験活動を生かす道徳の時間に読み聞かせを位置付けた一連の指導は、接続期の児童が安心して楽しく学びながら道徳的価値の自覚に向かうことができる一つの指導方法であることが明らかになった。

表5 園児と交流する前の記述より(一部)

- ・ようちえんの人は まだ ちっちゃいから、「おいで」っていうときは やさしくいいたい。
- ・ようちえんの人は学校のトイレがわからないから おしえてあげるよ。
- ・もし、ようちえんの人がころんだとき、「だいじょうぶ」って いってあげたいです。

表5に示す記述から、児童は絵本から膨らませたイメージを、体験活動で「こんなことをしたい」という思いへつないでいることがうかがえた。つまり、幼稚園の学び方を生かした読み聞かせを道徳に意図的に位置付けることは、接続期の児童にとって、自然な流れの中で体験活動への思いを抱かせる原動力になることが分かった。

接続期の児童は自分を振り返る力が十分育っていないので、道徳的価値を感じ取ることができない体験活動の工夫が必要である。この体験活動を道徳の時間につなぐために、読み聞かせを位置付けることで道徳的価値につながる思いを抱かせる必要があることが分かった。

今回、児童の体験により即した内容の資料を用いたいと考え、従来の副読本にある資料を基に道徳の時間に用いる資料を作成した。授業実践で紹介したように、資料を聞くことで児童は自然に園児と交流した体験を想起することができた。道徳の時間に用いる資料は、体験活動で感じた思いを道徳の時間に育てたい道徳的価値につなぐ上で大切な役割を果たす。特に接続期の児童にとって、道徳の時間に用いる資料は、自分の体験に基づき、自然に自分を振り返ることができるものであることが必要だと分かった。その点で接続期に用いる資料は、体験活動で感じた思いに

着目して選び、活用することが大切であるとする。

また、授業実践前、「道徳は少し難しい」「道徳はあまり楽しくない」と思っていた児童が、実践後、「お話は少し面白い」「お話を聞くことが好き」「先生が読んでくれるから楽しい」と記述したように、道徳を楽しく学ぶ姿が見られた。さらに、実践前から道徳の時間を楽しみにしていた児童の中に、実践後、「何のお話が出るかどきどきする」「そのお話の中で自分も遊んでいるような気がして好きだ」「紙芝居の中の動物の気持ちを考えるから楽しい」と、道徳の時間に大きな期待感を抱き、資料の人物の気持ちを考えようとする姿がうかがえた。

これらのことから、幼稚園で行う読み聞かせを意図的に取り入れることで、接続期の児童が幼稚園で身に付けた学び方の中で安心して学習し、小学校の学び方に近付くことができると考える。

2 今後の課題

幼稚園教育と小学校教育の滑らかな接続を図るために、次のような課題が挙げられる。

○ 接続期の実態を配慮した指導

接続期の児童は、幼稚園教育と小学校教育の内容や学び方の違いに不安や緊張感を抱いて入学する。したがって、児童の不安をできるだけ早く取り除くために、入学直後から行う道徳の時間に一連の指導を取り入れることが必要である。つまり、接続期の児童の実態に合わせ、タイミングを逃さない指導が必要である。

○ 学び方をつなぐ幼稚園と小学校の連携

授業実践で紹介した園児との交流後、幼稚園の教師から、小学生が積極的にかかわったことで園児が交流の場に慣れて楽しく活動できたことを聞いた。また、園児へかかわる様子から小学生の心の成長が感じられたという話を聞いた。このことから、接続期の児童の姿を通して、幼稚園と小学校の教師が情報交換することは、児童一人一人の成長やその児童のよさを共有し合うことになり、幼小連携の第一歩と考える。さらに、幼稚園と小学校の教師が保育指導や授業を公開し合うことにより、どんな指導内容をどのような形で展開しているかを理解し合うことが必要であるとする。それは、幼稚園の学び方を生かすために、小学校ではどの指導内容で、どのような学習の展開ができるかという手がかりをつかむことになると考えるからである。

以上のように、接続期の児童が感じている不安をできるだけ取り除き、児童の学び方をつなぐことができるよう、今後、幼稚園と小学校の教師が互いに協力し、指導方法の工夫に向けて取り組むことが必要であるとする。

V おわりに

今回は第1学年の10月から11月にかけて授業実践を行った。今後は、この研究の成果と課題を踏まえて、入学後の4月に実践したい。そして、従来の入学直後の道徳の時間の指導と比較し、更に幼稚園と小学校の滑らかな接続を目指した授業改善に取り組んでいきたい。

○参考文献

- ・ 文部省 (1992) 「幼稚園教育指導資料集第3集 幼児理解と評価」チャイルド本社
- ・ 文部省 (1995) 「幼稚園教育指導資料第4集 一人一人に応じる指導」フレーベル館
- ・ 文部省 (1999) 「小学校学習指導要領解説道徳編」独立行政法人国立印刷局
- ・ 文部省 (1999) 「幼稚園教育要領解説」フレーベル館
- ・ 山岸明子 (2000) 「道徳性の芽生え～幼児期からの心の教育～」チャイルド本社
- ・ 文部科学省 (2001) 「幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集」ひかりのくに
- ・ 文部科学省 (2002) 「心に響き、共に未来を拓く道徳教育の展開」財務省印刷局
- ・ 文部科学省 (2003) 「体験活動事例集～豊かな体験活動の推進のために～」ぎょうせい
- ・ 国立教育政策研究所 (2005) 「幼児期から児童期への教育」ひかりのくに
- ・ 佐々木直子 (2006) 「幼児期から児童期への発達を踏まえた教育のあり方」滋賀県総合教育センター「研究紀要」第48集
- ・ 佐々木恵理子 (2007) 「幼小連携のカリキュラム作りに関する研究」岩手県総合教育センター「岩手県教育研究発表会発表資料」第162号

